

見るプロ 伝えるプロへ

準硬式野球部 宮田匡二（昭和 57 年）

1. 社会へ出る前の準備

大学を卒業して 30 年も経つと、授業内容などほとんど忘れてしまっています。高い授業料を払って何を学び何を身につけたのか、どうもはっきりしません。キリスト教学の単位を取るのにてこずったことなど、どうでもいいことばかりが頭に浮かんできます。

しかし、スポーツを通して学んだこと、部活が縁となってその後の人生が形作られたことなど、今となっては非常に大切な 4 年間だったと振り返ることができます。つまり、社会へ出る前の準備として貴重な経験を積むことができた。自分自身が進むべき方向と社会への入り口を見つけるためには、欠くことのできない時間だったと言えます。

では、準硬式野球部で何を学んだのか。大学とは勉学に励み知識と教養を身につけることです。ただし、社会へ出るための準備として、それだけでは足りない。そこにスポーツが加われば、精神と肉体を鍛えることで人間としての幅を広げ、幹をより太く、大きくしていくことができる。

クラブは組織です。組織には役割があります。役割を担い責任を果たすことが求められます。勝つために戦略を練ることもあるでしょう。そこでは自己主張も大事ですが、自制心も大事。統率力や順応力、調整力も必要です。この組織の中に身を置くことで、いろいろな能力が磨かれていくのです。

社会へ出る前の準備として、もうひとつ大事なものがあります。それはアルバイトです。仕事です。お金を稼ぐのは大変だということを身をもって知ることです。私は部活の合間にいくつかのアルバイトをしました。焼き芋売り、花屋、青果店、交通整理や雑踏警備のガードマン、冷蔵庫の修理、エアコンの取り付け、選挙応援など。

焼き芋売りはくたびれた。サツマイモを 100 グラム 80 円で仕入れて 100 円で売って 20 円の利ざやを稼ぐ。単純な収益構造なのに、これが簡単ではない。売れ残りを母親に買ってもらい、余りを友人に配って回る始末。商売の難しさを知りました。選挙応援は時給が高い。選挙にはお金がかかることも知りました。

今の世の中、心の病を抱えている人は多い。ウチの会社にも何人かいます。ストレス耐性を身につけずに入社してきているのかもしれない。何ごとによらず、若いうちに経験するのはいいことです。教室の中では得られない何かを探す努力は、決して無駄にはならないと思います。

2. 「好き」を仕事に

大学 3 年のときです。ある新聞社で高校野球の記録係をやりました。夏の甲子園を目指す地方大会の、いわゆるスコアつけです。スコアブックに選手の打撃結果を記入していく。これを球場の記者席から本社のデスクに電話で伝える。それが翌日、新聞になっている。感激しました。新聞記者になれば、こうやって毎日、ただで野球を見ることができて、

うまくすれば有名選手に会えて野球の話が聞ける。これはいい。こんな楽しい仕事はない。あのとき、自分の将来が決まったのかな。あとから思えばですが、「準硬式野球部に入ってたよかったです」と。なぜなら、クラブが依頼を受けたアルバイトだったからです。そこに縁を感じるのです。

では、なぜ準硬式野球部に入ったのか。当初は高校と同じ硬式野球部に入るつもりでしたが、その高校の先輩の「このチームを立て直してくれ」という熱心な誘いを断り切れなかったのが理由です。聞き慣れない名称のうえ、入学した 1978 年当時は本当に弱かった。リーグ戦では阪大や神大に負けるような弱小チームで万年 B クラス。ルールは硬式と一緒に。ボールの材質は内側が硬式球と同じで外側がゴム。そういう中途半端さが私自身には合っていたのかもしれませんが。練習はいい意味で自主性を重んじ、アルバイトをする時間もあった。

3. スピードと準備

今、私は新聞社に勤めています。阪神、巨人を中心にしたプロ野球やサッカー、五輪競技や高校野球など、歴史的な瞬間や感動的なシーンを見るプロ、伝えるプロとして報道しています。

新聞社は締め切り時間との戦いです。スピードが命。巧遅拙速という言葉があります。巧遅は拙速に如かず。上手でも遅ければ、下手でも速いものに及ばないという意味です。素晴らしい内容の記事であっても、締め切り時間に間に合わなければ一銭の価値もない。入社直後に感じたことを今でも肝に銘じて仕事をしています。やや極端な表現かもしれませんが。上手で速いのが理想です。しかし、決断が速ければ修正がきくが、決断に時間をかければ、致命傷になりかねない。とにかくスピード感をもって仕事にあたる。そしてもうひとつ大事なのが準備。常に予測して備える。備えあれば憂いなしというでしょう。準備があれば決断も速い。

話を戻します。「チームを立て直す」という使命感にかられて入部を決めたわけですが、結果、リーグ戦は 2 位が最高でした。優勝には至らず、使命を果たせたのかどうか。ただ、主将を任せてもらえたり、全日本選手権に出場したこともあって、代表メンバーの一員として海外遠征に加えてもらうことができました。遠征先はフィリピン。野球の普及と親善が目的でしたが、非常にいい経験を積むことができたと思っています。現在、部員が 90 人もいるらしいですね。われわれのころはその 3 分 1 ほど。野球のレベルも上がっていると聞きます。1947 年の創部から 70 年近くがたちます。その長い部史の一時代にかかわることができた喜びを今あらためてかみしめています。

4. スポーツ最高！

スポーツはいいですね。見る人の心を豊かにして、ときには奮い立たせてくれます。この前、衆院議員の小泉進次郎さんが、こんな話をしていました。新聞の見出しを先に言うと、こうです。「スポーツ新聞の 1 面を意識せよ」「サニブラウンらに熱弁」「政界のプリンス、リーダー論語る」。これはダイヤモンドアスリートの教育プログラムの一環で、講演をし

たときの話です。ダイヤモンドアスリートとは2020年東京五輪での活躍を期待し、日本陸連が指定した若手選手。このときの講演で印象に残ったのは次の言葉です。

「自分が五輪に出るとき、スポーツ新聞に載ることをイメージしてほしい。スポーツ紙がスゴいのは、1面に1人の選手が独占して書かれているところ。金メダルを取った選手にはそれだけ自分の言葉を拡散するチャンスがある。自分が残すべきメッセージは何なのか。その世界の魅力や大変さを伝えていける言葉を磨いておいてほしい」

アスリートへ向けたはずの言葉でしたが、スポーツ紙に身を置いているこちらにもその意図が十分に伝わってきました。ニュースの記録と正確な伝達がいかに重要であることを再認識しました。

今、この段階から自分の将来を想像し、成功する姿をイメージする。強く思うこと、思い続けることが大事。本田圭佑は子供のころ、サッカー選手としてW杯に出ている自分をイメージして作文にし、実現させた。成功するために何をすべきか、どんな努力が必要か、それが明確になってくる。これはすべての人、どの世界で仕事をする人についても言えることだと思います。

スポーツは人の心を震わす感動と深く記憶に刻み込まれる教訓を与えてくれます。その感動と教訓を伝える仕事に携わることができるのは、関西学院大学準硬式野球部に在籍していたからだと思います。きょうは貴重な時間をお借りして、大学とスポーツというテーマで話をしてきましたが、体育会、サークルの区別なく、スポーツに接することへの喜びを感じ、幸せになってもらえれば、うれしいですね。卒業まで早いですよ。どうか充実した有意義な学生生活を送ってください。そして、遙かに長いその後の人生を大事にしてください。



(写真提供『関学スポーツ』)



(写真提供『関学スポーツ』)